
壊れた鏡

細河いをり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた鏡

【Zコード】

N9713L

【作者名】

細河いをり

【あらすじ】

私は墓の前に立ちつくしていた。三年前のこの日、私は死んだのだ。今日は私の三回目の命日なのだつた。

しかし、今の私は、この場にいる私は生きている。生きているのだ。しかし、それは私ではない。ここにいる私はもはや別の人格なのだ……

私は墓の前に立ちつくしていた。五月のまだ冷たい雨が墓石に降り注いでいた。黒い御影石の表面には戒名が書かれている。そこには、私の戒名が書かれている。そうだ。三年前のこの日、私は死んだのだ。今日は私の三回目の命日なのだ。

しかし、今の私は、この場にいる私は生きている。生きているのだ。しかし、それは私ではない。ここにいる私はもはや別の人格なのだ。

「総帥…」

雨に打たれ続けていた私の後ろから傘が上がった。振り返ると、秘書の黒田が側に寄っていた。私が子供の頃から、何十年も前から我が家に、そして我が社に仕えてくれている。まるで古武士のようないかつい風貌と眼光を持つ。

「やはり、ここででしたか」

「そう…だって、今日は私の命日ですもの」

私は、久しぶりに女の言葉を使った。それを使うことは三年前から禁じられていた。禁じなければならぬ所行だった。しかし、今墓地には私と黒田以外の人影は見えない。黄昏に近づいた雨の中、こんな場所に好きこのんでいる者はまずいない。この場であるからこそ、そして、側にいるのが黒田であるからこそ、私は女の言葉を使うことが出来る。

「もう…三年…由希人様が逝かれてから…」

「違うわ。死んだのは私…」

私は寂しく墓石を眺めた。そこに書かれているのは紛れもない私の名前だった。その下に埋まっている人間が私ではないとはいえる、本来の私は三年前に死んだのだ。

私の家はその地方でも知られた旧家であり、財閥だった。多くの山を持ち、材木の管理から一代で財を築いた曾祖父。それから連綿と、その家系と莫大な財貨は受け継がれていた。

そんな環境だったから、私の双子の兄である由希人は、随分期待され、また、厳しい教育を受けていた。父の後を継いで、いざれはグループを仕切る存在だった彼は、どこまでも拘束され、周囲の人々の目に晒されていた。

それに比べて私は気楽だった。女には後を継がせないのが方針だつたから、私はただ嫁に行くことだけを考えて日々を暮らせばよかつた。もっとも、相手だけは父が選ぶはずだったので、恋に身をまかせるわけにはいかなかつた。しかし、そんなことからどこか冷めていた私は、特に誰も愛さずに日々を過ごしてきた。

兄は、強い男だった。正直、私はこの兄を愛していた。線の細い、男にしては華奢な体つきだが、芯はしっかりして、指導者としての器を持つていた。大学を出た後、すぐに父から一つのグループを任されて、着実に実績を伸ばしていた。一年も経つと、彼の任せられた分野の実績は倍近くハネ上がり、翌年には更なる飛躍を期待されていた。それにひきかえ、私はなにもしなかつた。いや、できなかつた。また、父から近々、相応な企業の社長と見合いをする話も内々に出ていた。学生時代よりはいつそう何もなくなつた私は、無為に日々を過ごすしかなかつた。

兄が会社に加わって一年経つた。そんな時、父がまさかの飛行機事故であつさりと逝つた。そのため、すぐに兄が後を継いだ。しかし、その予想外の出来事に、盤石と見えていた我が家の中のグループも、急速に揺らぎ始めた。同族企業などは所詮そんなものかもしれない。父の弟、私たちにとつて叔父に当たる人物が、様々に兄と張り合つようになつてきた。軋轢は直に、会社としての業績にも響き始めた。そんな中で、兄は全力を振り絞り、会社建て直し、叔父を始めとした親戚達からの攻撃もはね除けていた。ただ、感嘆するしかない精神力だった。同じ双子でもこれだけ違うと、私は劣等感や羨望

を通り越して、ただ憧れるしかなかつた。

今だから分かるが、叔父達は相當に卑劣な行為を、兄に対しても繰り返していたらしい。他の企業を巻き込み、カルテルやダンピングを行つて、わざわざ兄の管轄する分野に大きな損害を与えていたようだ。兄はそれらの損を補填すべく、ほとんど超人的な働きをしていた。

しかし、とうとうそれが尽きた。具体的には、彼の肉体が尽きてしまつたのだ。信じられない話だつた。まさか、彼が病に倒れようとは。いつの間にか、彼の骨髄は蝕まれ、髄液の移植ももはや無理な状態へ成り果てていた。

五月の深夜のことだつた。あの日もこんな風に雨が降つていた。黒田が密かに手配してくれた車で、私はグループ関連の病院に駆けつけた。

集中治療室にいると思った兄は、その部屋にはいなかつた。黒田が駆け寄り、四階のある個室の場所を告げた。私はほっとしたが、黒田は逆に険しい顔をした。もつ、一刻の猶予も無いと彼は言つた。集中治療室を出たのは兄と黒田の強い意志だつた。そうだ。兄は誰もに聞かれずに遺言をすることを考えていたのだ。

私は慌てて階段を駆け上つた。病棟の四階にある個室群は、四の連想から普段は使われることがない場所だつた。この階の奥まつた個室に兄はいた。私は急いで部屋に入つた。

誰もいなかつた。医師も、看護師さえもいなかつた。ただ、兄がベッドに横たわつていた。粗末なベッドだつた。高熱にやつれたその顔を見て、私は即座に彼の死期を悟つた。

言葉もなく立ちつくしていた私の前で、兄が半身を起こした。死に近いその体に、そんな力が残つているのが大きな驚きだつた。しかし、次に彼が発した言葉は、更に私を驚愕させた。

「死んでくれ」、と兄は言つた。私は言葉も無かつた。もう一度、彼は言つた。「死んでくれ」と。苦しい息で喘ぎながら、彼は訥々と語つた。このまま自分が死んでは、グループは叔父の一派に乗

つ取られてしまう。それだけは絶対に許されない。死んだ後に父に会わせる顔が無い。兄は続けた。この夜、死ぬのは鍋畠由希人ではない。その妹である遙香なのだ、と。男女で一卵性の双子だが、私と兄はかなりよくその容貌が似通っている。兄は私に自分の身代わりになれというのだ。

思わず身を引いた私に対しても兄は言った。ホルモン注射で声と体型を変えることは不可能ではない。それに、小柄な兄と私の間にはさほどの身長差はない。十分に身代わりはできる。会社のことは黒田に任せればいい。ただ、お前はいるだけいいのだと彼は言った。黙つたまま返答できない私に対して、兄は何度も頼む頼むと繰り返した。熱い手を私の両肩に乗せて、涙ながらに頼んだ。それは、彼が私に頼んだ初めての願いであつたと思う。人に対して常に命令してきた彼は、たとえ妹でも私に頼みなどしたことがなかつた。

私は身震いがした。恐ろしかつた。しかし、同時にどこかでもう兄の提案を受け入れる覚悟はつき始めていた。どうせ、この後生きていっても、私という人間の人生、何かあるわけではない。父が死んだために流れていった見合いの話も、近々再燃させられる予定となつていた。好きでもない人間と一緒になり、子供を産んで、望まない家庭を作る：

私は首を縦に振つた。それでもいいのだと思つた。この日、死ぬのは兄ではなく私の存在なのだと。そして、もうほとんど力を無くしていいる兄の体を抱き寄せた。私は初めて腕に男の人を抱き寄せた。これで、最初で最後だと思った。この後、私は男として生きていく。その熱は、私が体験する、唯一の熱さであつた。そして、私が生涯唯一に愛した人のぬくもりであつた。

翌朝、兄は息を引き取つた。その遺骸は私のものとして処理がされた。全ては黒田がうまく手を回してくれた。その後私は手術で顔も変え、薬で声も変えて、兄の姿になりかわつた。

それから三年が過ぎた。全ては黒田が都合良く取りはからつてくれた。私には兄ほどの手腕はなかつたが、兄の姿が会社にあるだけでも、全てはこちらの都合良く動いていた。それだけ、兄の存在は大きかつたというわけだ。

私の顔は、兄の顔に成り果てている。それは私が女として生涯唯一愛した人の顔だった。その顔に私は成りすまし、この三年間を生きていた。しかし、いくら似ていても、所詮私は兄の姿を壊して映し出している。縮胸手術もし、薬の投与で男性の体のように見せかけてはいる。だが、私は所詮女の肉体でしかない。

黄昏を過ぎて、墓地には小さな水銀灯が点り始めた。私の名前が刻んである墓の上にも小さな明かりがまたたいて点る。その明かりが墓石を照らし、その滑らかな表面を、不完全な鏡のように映し出す。その墓石に映つたのは私の顔である。そしてそれは兄の顔でもあつた。そして、本当にその名前と顔を持つ人間は墓の下で眠つている。三年前のあの日、私と兄も二人とも死んだのだ。では、今ここにいるのは誰なのか…私ではなく、兄でもない人間がここにいる…後に残つたのは壊れた鏡。そう、死人の姿を映し出した鏡でしかないのだった。私は墓の前で額ずいた。私が無くした半分が、永遠に取り戻せないそれがそこに埋まつている。

私は立ち上がることもなくその場にいた。誰も、何も言葉もなかつた。五月の雨は時と共にその強さを激しく増していく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9713l/>

壊れた鏡

2010年10月8日14時42分発行